春日様　乗沢

此頃の春日と天子」の消息、月日に不審なり、又慶長年中の八宮御宮といふこと、日野殿の心志とは多少の記臆もあって、実永六年とも判断し難き廉あり、依之仙長老の本末を回御日記にあらず、又系譜類にあらざるに、果して前の擬定は如何なるか。是は慶長十七年のものにて、大事興福寺門跡一乗院尊政の消息と知れも、春日申れ。一と書名と云ふも、古の春日一乗院なり、孝義うも大坂城中の尼から云ふ訳、大阪の邪も家康なり、十（じゅう）宗は尊政の附属（後北尾宮の弟）尊慶法親王なり

慶長十七年とすれば、大日本史料も已にその年の条に附、門今の廉、全し符合の点を多し。世子へあてし手紙なれば、かさにつ、りにて、准后（尊政）に至る家康謁し、二世昌丸の祭を賜はり、春日社再建の時の手紙也。

尊政　近衛信尹公の令兄

春日は春日様とれど、一乗院一跡なり、実童は実命なれど、実永之年の事件に非ず、事件がナイサツ風なり申に、天道是非なし。

六月　日